
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 159

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 3161. 精神病理と集団的狂気
- 3162. 答える教師ではなく問える教師
- 3163. 意識状態の移行と夢
- 3164. 自らに問える教師
- 3165. 技術と思想の乖離:思想的裁判官の必要性
- 3166. ヨルゲン・ハーバーマスの批判理論から
- 3167. 猟奇的な上昇志向
- 3168. 「子育て」と親の教育:健全な自己批判について
- 3169. 暗闇の冷たい朝より
- 3170. コールバーグの道徳性発達理論に対するハーバーマスの議論より
- 3171. 文明の危機について
- 3172. アセスメントを取り巻く思想上の問題
- 3173. 発達測定について:意味と文脈
- 3174. そこにあるのは「スクーリング」か「ラーニング」か?
- 3175. それは本当に「病理」なのだろうか?
- 3176. 火曜日の朝に
- 3177. 「考える権利」の剥奪
- 3178. 哲学教育について
- 3179. 子供たちに「対して」か「共に」か?:相互発達の権威の必要性
- 3180. 没入と超越

先ほど昼食前に買い物に出かけた時、フローニンゲン上空の雲行きがとても怪しかった。天気予報を確認すると、今日は曇りとのことであったが、その雲は間違いなく雨雲であった。とはいえ、自宅を出発した時には雨が降っておらず、近所のスーパーに行く程度であるから問題ないと思っていたところ、スーパーを出てすぐに雨が降り始めた。しかもそれは通り雨であり、私がちょうど自宅に着いた頃には雨が止んだ。

いつもは幸運にも、外出から戻ってきたタイミングで雨が降ることが多いのだが、今日は久しぶりに雨を少々浴びた。今は雨が止んでおり、曇った景色が目の前に広がっている。

書斎の窓の外に見える街路樹は、まだなんとか緑色の葉を残している。それが完全に赤くなるのはもう少し先のようなのだが、明日からの冷え込みを考えると、想像以上にそれは早くやってくるかもしれない。来週の木曜日からボストンに旅行に出かけ、旅行から戻ってくる時にはもう街路樹の葉は真っ赤になっているかもしれない。

午前中にフーコーの書籍を読みながら、諸々の精神病理は作られるものなのかもしれない、ということを考えていた。人間発達の観点からすると、病理と固有性の判断は非常に難しく、真に病理的なものは病理として認めなくてはならないのだが、現代は過剰に病理を規定しているようにも思えてくる。あるいは、現代社会はそれが本来病理的なものでなくても病理としてみなしたり、あるいは逆に本来病理的なものであるはずのものを見過ごしてしまっている状況にあるように思えてくる。とりわけ、前者に関しては、現代社会はどこか不必要に病理を認定することにより、それが結局のところ数多くの病理を生み出すことにつながっているように思える。

それもそのはずで、病理として認定した瞬間にそれは新たな病理として誕生するのであるから、現代のこうした状況は精神病理を増殖させることに加担しているのではないかとと思われる。また、例えば現代人の思考停止状態の方がよほど精神病理的であるし、金銭の盲目的信奉の方がよほど病理的であるように思えるにもかかわらず、それらは精神病理としてみなされることがない。こうした状況によって、そうした症状はより悪化の傾向をたどっているように思える。

そのようなことを考えていると、これは何も精神病理だけに当てはまる事柄ではなく、私たちの知性の種類においても当てはまるだろう。これは以前の記事の中で書き留めていたが、私たちは自分たちの知性をひどく限定的なものとして捉えてしまい、本来多様性と固有性を持つ自らの知性を見る目が曇らされている状態にあるように思える。

長らく日本の教育を受け続けていれば、それは日本の社会が規定するひどく限定した知性に自らを閉じ込めることになってしまう。そこで育まれるのは企業社会と癒着した「学校的知性」であり、私たちの多くはそれを知性だと思い込んでいる節がある。

発達心理学者のハワード・ガードナーが指摘しているように、本来私たちの知性は多様性を持つのだが、学校教育を通じて極めて限定的な知性しか涵養されず、さらにはそれらしか知性がないと思いついてしまうようなひどく限定的な発想の枠組みが知らず知らずのうちに出来上がってしまう。重要なことは、自らが知性だと思っているものが、実は政治経済的な力学によってそれが規定されていると認識することであり、知性の範囲を狭めるような限定的な発想の枠組みから脱却し、自らの固有の知性が何なのかを見極め、それを育てていくことなのではないかと思われる。

日本の成人人口は一億人ほどいるらしいが、一億人もの人間が、ごく少数の、しかも発揮される領域が極めて限定的な知性を躍起になって高めようとしているのは集団的狂気のように思える。フーニンゲン:2018/9/22(土) 13:22

3162. 答える教師ではなく問える教師

時刻は午後の七時半を迎えた。今日も一日があつという間に過ぎ去って行った感覚がある。

先ほど入浴をしながら、現代の教育において芸術教育や霊性教育がないがしろにされてしまう理由について考えていた。思想的な問題の一つは、企業社会と教育社会の癒着、あるいは教育が企業社会の発想の枠組みに隷属してしまっていることではないかと思う。端的には、企業社会に根強く存在する、定量的に測定できるものが良いものであり、それ以外は蔑ろにされてしまうという慣行が、そのまま教育の世界に流れ込んでしまっているのではないかと思う。確かに教育は、将来仕事を通じてこの世界に関与していくための役割を果たすべきだが、現代の教育は、企業社会の

中でいかに金銭を獲得できるかの極めて限定的な技術や知性を育む場と化してしまっているように思えて仕方ない。

企業社会の中で多くの金銭を獲得するためには、定量化できない芸術性や霊性はほぼ無価値のものとして扱われてしまい、それが芸術教育や霊性教育の抑圧につながっているのではないかと思う。これはより突き詰めて考えていく必要があるが、芸術教育や霊性教育の抑圧の背景には、企業社会に蔓延する思想の歪みが存在していることは疑いようのないものに思えてくる。今後、芸術教育や霊性教育の意義について考察を深めていく際には、この問題についてより掘り下げていきたいと思う。

秋のある土曜日がゆっくりと終わりに向かっている。今日は一日中曇り空であり、今も鬱蒼とした雲が空を覆っている。そうした最中であって、一日が一つのかげがえのない粒子として存在し、それが数珠のようにつながっているのがわかる。今日という一日も間違いなく何気ない一日だったのだが、それが極めて大切な一日であり、自分の人生における全ての日と密接なつながりを持っていることがありありとわかる。明日もきっとその日のかげがえのなさを感じることができるだろう。

教師の役割として、単純に知識を与えるよりも、適切な問いを生徒に投げかけるかがいかに大切かについて考えていた。これは企業社会における上司部下との関係を含め、広く当てはまる事柄だと思う。そもそも教師というのは、生徒からの質問に全て答えることはできないだろうし、答える必要もない。仮に提供した答えが、生徒の発達段階にそぐわないものであれば、そこには教育効果はないに等しい。

重要なことは、生徒たちを一步前に成長させていく問いを与えることなのだと思う。現在の生徒の立ち位置を見極め、その生徒に最適な問いをいかに投げかけられるかが、生徒を真の成長に導く教師なのだと思う。

私は社会人になってから、二回ほど海外留学を経験しているが、その際にいつも有り難く思っていたのは、自分に投げかけられる問いであった。正直なところ、教師から答えをもらうことは御免であった。往々にして教師の口から発せられる答えは、教師にとっての答えであったとしても、私にとって

の答えではないことばかりである。私を発達に導いてくれた良き師は全て、その時の私にとって最適な問いを投げかけてくれる存在であった。

教師は生徒からの質問に答えるために必死に知識を積み込むのではなく、一人一人の生徒にとって最適な問いを投げかけられるような知性を自ら育んでいく必要があるのではないかと思う。

立場上、協働プロジェクトを行う際には、人間発達に関して私も諸々の質問を受けることが多くなったが、自分の答えを述べることよりも、まずは相手にとって最適な問いを投げかけることを意識する必要があると反省させられる。フローニンゲン:2018/9/22(土) 19:49

No.1322: The End of a Brilliant Day

Today will end soon, and I have a sense of fulfillment now. I wish tomorrow will be as fulfilling as today. Groningen, 21:02, Monday, 10/15/2018

3163. 意識状態の移行と夢

今朝は六時半に起床し、七時から一日の活動を始めた。時刻が七時を迎えると、辺りは少しずつ明るくなってきた。どうやら今日も一日を通して曇りのようであり、夕方には雨が降るようだ。最高気温は14度であり、最低気温は8度とのことである。九月も半ばを過ぎ、もう季節は完全に秋の様子だ。

昨夜就寝前に、いつもと同じようにゆったりとした呼吸を何度か行い、身体をゆるめてみると、額の中央に光を感じた。それはそれほど強烈な光ではなく、青白い円—もしくは球—のような光が現れ、それが揺らめいていた。こうした現象は意識がグロスからサトルに移行するとよく生じるものであり、そこからも観察を続けた。呼吸の深まりと共にサトル意識が深まってくると、今度はこの意識状態の特徴である多数のイメージが知覚された。

ただし、普段サトルの意識状態で眺めているイメージほどの数ではなく、いくつかのイメージが瞬間瞬間に変貌を遂げ、次のイメージとして立ち現れている。そうしたイメージの運動を静かに観察していると、意識が何度か飛ぶことがあった。まさにそれは、サトルからコーザルの意識に移行していることのサインだった。

コーザル意識からサトルの意識状態に戻ってくると、自己の認識の仕方が極めて特殊になる。覚醒意識の今、それを言語を通じて説明するのは難しいが、本来自己の内側にある意識が自己から離脱し、超越的な視点で自己そのものを捉えている感覚、と言ったらわかりやすいだろうか。こうした感覚が得られると、不思議と人生全体への超越的な俯瞰認識が生まれ、独特な解放感のようなものが得られる。そしてそうした解放感は、穏やかさを心にもたらしてくれる。そのようなことを体験しながら昨夜は眠りについた。

今朝方は印象的な夢を見ていた。今はもうその夢の記憶は断片的なものになってしまっているが、覚えていることを書き留めておきたい。

夢の中で私は、小学生に戻っており、実際に通っていた小学校の校舎の中にいた。学年で言えば、おそらく小学五年生の頃だ。

隣の席に座っている女の子が近々引越しをするらしく、その子をどう送り出すかについて私は考えていた。クラスのみんから寄せ書きを集めたり、一人一人がその子に話しかけ、お別れの言葉を述べるのはどうかと考えていた。そのようなことを考えていると夢の場面が変わった。

次の夢の場面も再びその教室の中であり、先ほどの夢に出てきた女の子が私の近くにいた。特に言葉をかわすことをしなかったのだが、やたらと近くにその子がいたので、少しばかり私は戸惑っていた。授業が始まると、やはりその子は私の隣の席に腰掛けており、またしても二人の距離はとても近かった。そのまま授業が進んでいく中で夢から覚めた。

今朝方の夢について覚えていることはとても少ない。実際には各場面の中でもう少し様々なことが起こっていたように思うが、書ける範囲のことを書き留めておいた。今夜も意識状態が様々に変容し、何かしらの夢を見るかもしれない。フローニンゲン:2018/9/23(日)07:22

3164. 自らに問える教師

昨日、答えではなく、問いを与えることのできる教師について考えていたことを思い出す。他者に問いを与えるための要件とは何かについて少しばかり考えを巡らせていた。問いを与えることに関して、確かにそうした態度を養っていくことができれば、他者に問いを与えることは可能になるように思

えるが、単に態度の変容から行われる問いかけは得てして表面的なものになりがちなのではないだろうか。

そもそも、問いを与えることに関して重要なのは、問いを与える態度が変わることよりも、目の前にいる生徒の成長度合いを見極めるような眼を持つことであり、そうした眼を獲得しない限りは、仮に問いを投げかけられるようになったとしても、生徒の成長につながるような問いを投げかけることは難しいだろう。

教師の役割の一つは間違い無く、一人一人の生徒の発達プロセスに寄り添いながら、彼らが次の発達段階に移行していける手助けをすることにあるように思う。こうしたことを行うためには、生徒一人一人の発達プロセスを絶え間無く観察し、一人一人の成長度合いを見極めていく必要がある。

では、そうしたことを可能にするためには教師に何が必要なのかを考えていた。思うに、生徒一人一人の発達プロセスを見極め、各生徒が持つ多様な知性の多様な発達段階を見極める前に、教師そのものが自己の発達プロセスと各種知性の発達段階を理解しているかどうかがかぎを握るように思う。これは言い換えれば、教師の自己認識の問題とつながってくるだろう。生徒の発達プロセスを絶え間無く観察するためには、そもそもそうしたことを教師は自分に対して行えているのかを確認する必要があるだろう。

また、生徒に問いを与える前に、そもそも教師は自らに絶えず問いを投げかけているのかを問う必要があるように思う。ひょっとすると、対他者 (interpersonal) と対自己 (intrapersonal) の二つの領域において、発達プロセスを掴む力と問いを投げかける力は異なるものである可能性もあるが、いずれにせよ、教師の発達度合いが生徒に与える影響は多大なものであることを考慮すると、対自己における認識を深めていくことは必要だろう。

人に問うためには、自らに問えるかどうか。その点は教師のみならず、対人支援に携わる全ての者にとって非常に大切なことのように思う。

今日は日曜日であるが、普段と変わらない一日を過ごす。昨日ふと自分の一日を眺めてみたとき、結局、食事、トイレ、入浴などを除いた他の全ての時間を書斎の中で過ごしていることに気づいた。

書齋の中で行っていることは、探究活動、創造活動、協働プロジェクトに関する仕事に分けることができるが、それらはどれも自分にとってはライフワークであり、一生涯を通じた学びであることに変わりなく、そう考えると、一日のうち十数時間は学びの中に自分がいることに気づく。

欧州での二年間は、早朝の六時か七時から一日の学びを始め、夜の十時までそれを行うことを自然と続けていた。それは欧州での三年目の生活においても継続されるだろう。来年は環境を変えたとしても、結局そこでも同じリズムで一日を形作っていくことになるだろう。自分が本当に絶え間ない学びの中にいることに改めて気づく。フローニンゲン:2018/9/23(日)07:45

3165. 技術と思想の乖離: 思想的裁判官の必要性

昨日は、ミシェル・フーコーの“Madness & Civilization: A History of Insanity in the Age of Reason (1965)”と、ヘレナ・ブラヴァツキーの“The Secret Doctrine: The Synthesis of Science, Religion, and Philosophy (2014)”の第一巻を読み終えた。

今日は、ヨルゲン・ハーバーマスの批判理論に関する“The Critical Theory of Jurgen Habermas (1988)”という書籍を読み進めたい。ハーバーマスは発達心理学者のローレンス・コールバーグの道徳的知性の発達段階に関する理論にも造詣が深く、この理論に立脚した書籍も書齋の本棚に眠っており、近々そちらの書籍も読み進めていくことにしたい。

発達科学の世界に入り、今は発達科学そのものを俯瞰的かつ批判的に捉えるために哲学を学ぶ必要があると強く実感している。それは単に抽象的な議論に留まるものでは決してなく、私が関心を持っているのは、人間発達や教育に関する思想的な枠組みの是正のための哲学であり、そうした枠組みのさらなる発達につながるような実践的な哲学である。

哲学を学べば学ぶほど、哲学が実践的なものであると感じられるようになってきていることは以前の日記でも言及していたように思う。哲学が持つ実践的な側面は、ある実践領域の思想的枠組みを整備することにより、その中での実践のあり方や進め方が大きく変容する可能性を持っているということにある。私たちのいかなる実践領域も、単に外面的な仕組みだけではなく、内面的な思想に立脚していることを忘れてはならない。人間発達や教育という実践領域も、まさに仕組みと思想の二つが相互に影響し合って初めて成り立つものである。

とりわけ私が強い関心を抱き始めたのは、思想的側面に関するものであり、その背景には、人間発達や教育に関する研究に従事する過程の中で、最先端と呼ばれる研究がこれほどまでに進んでいるのに対して、なぜ人間発達や教育というものがうまく進んでいかないのか、というもどかしさがあった。それは端的には、人間発達や教育に関する技術は進歩しているが、技術を持ちいる個人や集合の思想的脆弱性に対して問題意識を持ち始めたと言える。現代社会においては科学技術の進展は目覚ましいものがあり、実は人間発達テクノロジーや教育テクノロジーも随分と進化を遂げている。

とりわけこの二年間は、人間発達と教育を科学の観点から探究することに力を入れており、様々な研究者の仕事を見てきたところ、人間発達や教育を取り巻くテクノロジーは確実に進歩を遂げている。だが、技術的な進歩(外面的進歩)があつたとしても、思想的な進歩(内面的進歩)が全く追いついていない状況はとても危険なのではないかと思つたのである。

昨夜も就寝前に、奇妙な問いと向き合っていた。「全人類及び地球を一瞬にして壊滅させることのできる人物は誰か?」という問いであつた。その問いに対する答えは単純であり、「すべての人間」というものだった。具体例として即座に思い浮かんだのは、その日に生まれた赤ん坊であつた。

その赤ちゃんの目の前に、地球の全方位に飛んでいく核兵器のボタンを置けば、赤ちゃんがそのボタンを押し、地球を壊滅させることができるかもしれない、ということを考えていた。あえて私は極端な例を考えていたが、地球を一瞬にして壊滅させるだけの技術はすでにこの世界に存在しており、実はそれは赤ちゃんでも使えてしまうということに大きな危機意識を持った。

現実上は、赤ちゃんはそうした技術にアクセスできないように今はなっているが、現代社会においてそうした技術にアクセスできる人は増えてきている。一方で、そうした技術を活用する人たちの内面的発達が未熟であれば、それは悲劇的な大惨事を生み出しかねないだろう。

そのようなことを昨夜はしばらく考えていた。この事例のように、人間発達や教育を取り巻く技術は随分と進歩を遂げているのに対し、思想的な進歩がほとんど見られないことに私は危機意識を持っている。人間発達や教育を取り巻く現代社会において、思想的な警察、いや思想的な裁判官のよ

うな存在や役割が強く求められているのではないか。そのようなことを思う。フローニンゲン:2018/9/23(日)08:08

No.1323: A Light in Mist

Groningen in the morning was slightly veiled in mist. I was seeing a shining light in the misty world. Groningen, 08:51, Tuesday, 10/16/2018

3166. ヨルゲン・ハーバーマスの批判理論から

今朝は起床後にとっても肌寒く感じられ、まだ何とか暖房をつけずに生活しているが、ボストンから戻ってくる次の週には暖房をつけ始める必要があるかもしれない。

つい先ほど昼食を摂り終え、今は小雨が降っている。とても冷たそうな雨だ。早朝の予報では最高気温は14度とのことであったが、もう一度予報を確認すると、最高気温は12度までしか上がらないらしい。道理で寒いわけである。

今日は午前中に、ヨルゲン・ハーバーマスの批判理論に関する“The Critical Theory of Jurgen Habermas (1988)”の初読を終えた。本書はとても実りの多い書籍だった。

ローレンス・コールバーグの道徳性の発達理論を用いながら論を進めている箇所については、今後また読み返す必要がある。ハーバーマスは、私が思っていた以上に発達心理学の枠組みを活用しており、とりわけピアジェからの影響を強く受けているのだと知った。発達心理学の枠組みを採用しながら批判的に社会の問題を考察していく道をハーバーマスは示してくれたように思える。

本書を読みながら考えていたことは多岐にわたるが、経済空間の構造的な問題が公共空間に影響を与え、社会・文化的空間の質を劣化させているというハーバーマスの指摘にはとても納得がいく。ハーバーマスは、公共空間はそもそも、空間内での人々の対話の質と関与の質によって規定されると述べている。現代社会においては、政府の形を取らない形で、巨大な企業群が中央集権的な力を発揮しており、人々はその力に屈服・抑圧されているような状態が見受けられる。たとえば、マスメディアによる情報などは中央集権的な形で市民に流される。

確かにここでは、ソーシャルメディアの発達などによって、そうした情報に対して市民はあれこれ議論はできるのだが、そもそも流されてくる情報が最初から限定的であることや、ひどく歪められたものであることに多くの市民は気づいていないのではないかと思われる。そうした限定的かつ歪んだ情報に基づいて市民は議論をすることを余儀なくされており、それが結局のところ公共空間の対話の質を劣化させているように思える。また、多くの市民は情報を得るだけ、もしくは消費するだけで満足するように飼い慣らされているのだから、社会に関与をしていこうというアクションもほとんど期待できない。

公共空間の中における対話と関与の質の劣化により、私たちの社会・文化的な空間はますます劣化していく。本書の中で用いられていたハーバーマスの言葉は、“crisis of social-cultural sphere”であるから、私たちは社会・文化的な空間の危機に瀕している、あるいは崩壊の危機に瀕していると述べた方が正しいかもしれない。

今日は午後からシュタイナー教育に関する書籍の続きを読み進めていき、明日以降からは教育哲学に関する書物を読む計画を立てているが、近日中に本棚に置かれたままになっていたハーバーマスの他の書籍を読み進めていきたいと思う。フローニンゲン:2018/9/23(日)13:12

At Refreshing Lunch Time

It is very refreshing in Groningen today. Enjoying such an atmosphere, I'll eat lunch. After lunch, I'll go to a barbershop and a secondhand bookstore to purchase some books about philosophy.
Groningen, 11:40, Tuesday, 10/16/2018

3167. 猟奇的な上昇志向

時刻は午後の七時半に近づきつつある。午後から降り始めた雨が今は止み、穏やかな世界が広がっている。

今日も探究活動と創造活動に十分に励むことができ、明日からの新たな週をまたより充実した形で過ごせるような予感がある。来週の木曜日には、いよいよ五年振りにボストンを訪れることになる。

月曜日から水曜日にかけても、今日と同じような形で、自分のライフワークを少しずつ前に進めていこうと思う。今のところまだ博士課程に進学するかは未定なのだが、仮に博士課程に進学し、博士論文を執筆する際には、芸術教育の意義や価値について歴史的に考察していく予定であることは先日の日記で述べた。

本日ハーバーマスの書籍を読みながら閃いたのは、芸術教育が現代の教育において抑圧されている背景には、何かしらの力学があり、それは歴史的な発展を遂げてきたのではないかという考えだった。この点について是非とも深く知りたい。芸術教育の意義や価値についていかに哲学的に論述したとしても、そもそもそうした意義や価値を抑圧する力学を解明していかなければ、これからの芸術教育のあり方は見えてこないだろう。

今日も相変わらず雑多なことを考えていた。一つは、人類は絶えず発達し続けているというユートピア思想についてだ。確かに私たちは絶えず進化の方向に歩みを進めているのかもしれないが、問題は短絡的な上昇志向が蔓延していることだろう。

人類が絶えず発達を遂げ続けているという発想の危険性は、例えば日本の不動産が上がり続けるという神話を信じ続けていた人が過去に経験したことや、今から少し前に起こった金融危機などを見ていると強く実感することだ。

誰もが上がり続けると思っていたものが突如崩壊するという事態を私たちは歴史を通じてたびたび目撃しているはずだ。人間の発達はそもそも、常に上昇し続けているものでは決してなく、停滞や退行を繰り返していることはすでに発達科学の研究によって明らかになっているにもかかわらず、私たちは人間が絶えず発達を遂げていくと盲信する傾向にある。

上記で述べたように、仮に発達方向性はあったとしても、人間の発達を信じることもはや意味をなさないほどの生存的な危機に今後直面することは十分に考えられる。人間の中に潜む、現象が絶えず上昇するということを信じさせるエロスの力はあまりにも巨大すぎる。そのように考えると、現代は下降の道を忘れ、アガペーを見出しにくい時代なのかもしれない。

今日は就寝までの時間を使って、まずは本日三回目の作曲実践を行う。これから飯を求めるのはモーツァルトだ。モーツァルトの変奏曲を参考にした後は、時間があればさらに読書を進め、就寝一時間前あたりから過去の日記の編集を行おうと思う。フローニンゲン:2018/9/23(日)19:38

3168. 「子育て」と親の教育:健全な自己批判について

ここ最近、「子育て(parenting)」について色々と考えている。子育てほど難しいものはもしかしたらこの世にないかもしれないのだが、その方法について教えてくれる場がほとんどないのはなぜなのかを考えていた。

表面的な知識を得る場ならあるのかもしれないが、人間発達や学習の要諦を抑えた子育て教育の場がこの世界にほとんど見当たらないのは驚くに価する。霊性を涵養する方法や自らの資産を保護・形成していく方法を学ぶ場が少ないこと以上にそれは問題のように思える。

確かに今の私は、教育哲学を探究し、現代及びこれから求められる教育のあり方に積極的に関与していこうと思っている。しかし、学校教育の現場がいくら変わったとしても、それと同等に、あるいはそれ以上に重要な家庭の場における教育が現状のままでは全く意味がないのではないかと考え始めている。

子育ての難しさは、たとえ親が人間発達や学習プロセスについて少々知っていたとしても、様々な情が勝ってしまうことや、自己のシャドーの投影を含め、無意識的に子供の健全な発達を阻害してしまう事態が生じることにあるだろう。そのように考えると、子供を持つ親が単に人間発達や学習に関する知識を表面的に知っているだけでは意味がなく、それらの本質を体験を通じて学び、それが実践に通じる次元にまで高めていかなければならない。その道のりはかなり険しそうだ。

今はそれを実現させるための方法を模索している。このところは本当に、子供の教育のあり方の変革と同時に、親への教育を社会規模でいかに充実させていくかがカギのように思っている。

昨日と同じように、先ほども入浴中に、自分が科学の道から哲学の道に方向転換したことについて考えていた。確かに今でも発達科学の研究の知見については関心を持ち続けているが、自ら科学的研究を行うことにはもはや関心はなく、哲学的な探究に強い関心を持っている。今の私の関心は、

科学的な研究の成果をいかに解釈し、それをどのように活用するかに関する思想的な枠組みを整備することにあると言えるかもしれない。こうした方向転換に至った背景には、健全な自己批判の精神が自分の内側に宿っていたことと関係があるように思える。

これまでは一特にこの二年間は一、科学的な枠組みを使って発達研究に邁進していたが、ある時ふと、そうした研究を行っている自分自身、さらには研究分野を取り巻く思想や、研究成果を参照する一般の人々のあり方に疑問を呈するようになった。そうした疑問には科学は何も力を発揮してくれず、そうした疑問に自ら答えを見出していくためには哲学的な枠組みが必要だった。

発達には健全な自己批判が必要だと言われるが、まさに上記のプロセスは自己批判が自分に働いたことの一例だろう。今の私は、毎日救いを求めるかのように諸々の哲学書を読み進めている。教育哲学に関しては、手に入る限り全ての書籍と論文を読みたいという強い思いが今日も湧き上がっていた。一人の人間の探究は発達と同様に一生涯に渡って進んでいくというのは、探究の過程で常に新たな課題とぶつかり、その課題を解決した先には新たな課題とまたぶつかるからなのだろう。健全な自己批判を絶えず行いながら、常に新たな自己の課題と向き合い続けていくことは、今後の自分の人生の中からはなくなりそうはない。フローニンゲン:2018/9/23(日)20:03

3169. 暗闇の冷たい朝より

今朝は六時前に起床し、六時を過ぎたあたりから一日の活動を開始させた。このところ良質な睡眠を取れているような気がする。それが目覚めの良さに現れており、一日を通じた活動に良い影響を与えている。

このところは、起床時には辺りが闇の状態となった。日が昇るのはこれからますます遅くなっていくだろう。

今日の気温は昨日に続きとても低い。週間予報を確認してみると、おそらくボストンからフローニンゲンに戻ってくる十月初旬からは暖房をつけ始める必要があるかもしれない。そのようなことを思わせる朝だ。

今日も昨日と同様に、探究活動と創造活動に打ち込む一日としたい。今日から新たな週を迎え、気分を新たにしながらも、これまで行ってきたことを同様のリズムで行っていく。具体的には、今日は午前中から、“The Collapse of Complex Societies (1988)”と、ヨルゲン・ハーバーマスの“Moral Consciousness and Communicative Action (1990)”の二冊を読み進めていきたい。

どちらの書籍も随分と前に購入したのだが、まだ手付かずの状態であった。前者の書籍はタイトルの通り、人類史を遡り、人間の複雑な文明社会がいかに崩壊していったのかに関するプロセスとメカニズムを解説しているものである。まずはこちらの書籍を午前中に読み始め、今日の早い段階で一読目を完了したいと思う。初読の書籍に関しては、内容を細部まで理解しようとするのではなく、全体観を把握するようにし、その中でも自分の関心を引く箇所を中心に読み進めていく。

初読時はまるで、未知の土地に訪れるかのような感覚があるため、その土地に慣れるように、土地勘を養うようなイメージで初読を進めていく。自分にとって馴染みのない分野であればなおさら、最初から全てを理解しようとするのではなく、私たちの知識や理解は段階的に構築されていくものであるから、初読の際は概要把握に努め、それに加えて自分の関心事項に合致する箇所を丹念に読み進めていけばいいように思う。

ハーバーマスの書籍に対しても同様の方法で読み進めていく。とりあえず今日はこの二冊の一読目を完了させることができればと思う。こうした読書に並行して、作曲実践を行っていく。今朝はまず最初にハイドンに範を求めて一曲作りたい。

とにかく今はまだ型の習得時期であり、過去の作曲家の作品を参考に数多くの曲を作っていく。過去の偉大な作曲家たちが体現していた作曲法則を実践を通じて体得していく。当然ながら知的な理解を通じても、そうした作曲法則なるものの一端を掴むことができるだろうが、それを真に掴むためには、実践を通じた直接体験が必要であり、膨大な量の実践が必要になるだろう。過去の作曲家の作品に直に触れ、皮膚感覚を通じて作曲実践を行っていくことを今日からまた意識する。

自分の作曲語法が確立されるのは、本当にあと数年後からで十分だ。今はとにかく短い曲を膨大に作っていくという実践を最重視する。フローニンゲン:2018/9/24(月)06:44

今朝は早朝に雨が降り、昼食時にも少しばかり小雨が降った。しかし今は一転して、青空が広がっている。

一昨日と同様に、近所のスーパーに本日出かけた時に、帰り際に小雨に遭った。私が自宅に到着してすぐに雨が止んだため、雨に見舞われたのもそれはそれで奇跡的なことだったと言えるかもしれない。

早朝に、ハイドンに範を求めて一曲作った。今参考にしているハイドンの変奏曲は、リズムが非常に小刻みであり、それを参考にして曲を作ろうとすると少しばかりリズムが歪なものになってしまうことがある。そうした点に注意しながら曲を作っていた。メロディーやハーモニーについて参考にするだけでなく、これからはリズムにもより焦点を当てていきたいと思う。

あと数年間、数千ほど過去の作曲家の曲に範を求めることによって、ようやく自分なりの作曲語法が確立されていくのだと思う。そうした日がやってくることを期待しながら、毎日小さな実践を地道に積み重ねていきたい。

今また雨が降り始めた。遠くの空は晴れているのだが、自宅の上空には灰色の雨雲が存在しており、それが小雨を降らせている。

ここ数日間は本当に変動の激しい天気が続いている。今朝はあまりにも寒かったため、結局今日から部屋の暖房をつけることにした。まだ十月を迎えていないが、暖房をつけておかないと朝晩がとてつもない冷える。

今日の午前中は作曲実践に並行して、旺盛に読書を行っていた。とりわけ、ヨルゲン・ハーバーマスが執筆した“Moral Consciousness and Communicative Action (1990)”は、思っていた以上に有益な内容であった。特に、ハーバーマスが採用しているローレンス・コールバーグの発達理論に対する哲学的な議論が非常に洞察に溢れていた。コールバーグの道徳性発達理論はそもそも、カントやロールズの道徳性理論に立脚している。そうした哲学的な支えを背景にして、コールバーグは

提唱する段階モデルを裏付けていく実証実験を丹念に進めていった。ハーバーマスがコールバーグの理論の不十分な点について論述している箇所は繰り返し読んでいく必要がある。

ハーバーマスの説明を読みながら、雑多なことを考えていた。「発達には善である」という思想の問題点については、これまで何度も言及してきたように思う。この点について、コールバーグは、「道徳性に関する高次の段階は、低次の段階よりも道徳的により良く、道徳的により適切だ」と明確に述べている。この指摘を短絡的に受け取ったり、曲解することは極めて危険であるということは、これまでの日記で言及してきた通りである。

だが一方で、なぜコールバーグがそうした主張を強く押し出すことができたのかについて、ハーバーマスの説明を読みながら納得することがあった。一つには、コールバーグは多様な発達領域の高度化が即座に「善」に結びついていると述べているわけではなく、道徳性の範囲に限定して論を丁寧に進めている点だ。

道徳性に関する高次の段階は、低次の段階よりも道徳的により良く、道徳的により適切だという主張の背後には、カントやロールズの道徳性理論との整合性の検証と、実証的な証拠の積み上げがある。そうした検証と証拠をもってして、コールバーグは上記の主張を行うに至ったのだということを改めて認識した。

ただし繰り返しになるが、道徳性以外の発達領域については、それを支える哲学的な枠組みが欠如していたり、実証的な証拠が何一つないようなものの方が多いため、多様な発達領域をひとまとめにして「発達には善である」と見なすのはとても短絡的な発想であることには注意しなければならない。

午後からも上記の書籍の続きを読み、一読目が終わったら、コールバーグの発想の枠組みに対するハーバーマスの議論をもう一度丹念に読み返そうと思う。フローニンゲン:2018/9/24(月)13:16

3171. 文明の危機について

—人間の文明は、私たちの命と同じぐらいに儂く脆いものである—ポール・ヴァレリー

午前中には、ハーバーマスの書籍を読む前に、“The Collapse of Complex Societies (1988)”を読んでいた。本書が考古学に分類されるものであるということは、本書を購入して手にとって初めて知ったのだが、本書は文明の衰退と崩壊のプロセスとメカニズムを綿密に調査しており、とても感銘を受けた。複雑性科学の観点から考えると、非常に納得のいく説明が随所になされており、これまで漠然と抱いていた説明論理に対して、考古学的な観点から新たな言葉を提供してもらったような気がした。

本書を読みながら、現代社会の崩壊の危機について考えざるをえなかった。「文明が終わる」ことに関してハッピーエンドはありえず、絶望的な崩壊が不可避なのだと思改めて思う。そもそも文明が「終わる」ことに関して最初から平和的な終わり方などありはしないのである。「終わる」時には崩壊しかない。そのような考えを一層強く持つ。

著者が指摘しているように、これまでの古代文明と現代文明は諸々の点において異なるのは確かだが、著者が丹念に調査した、崩壊した文明の特徴を見てみると、現代文明もそれに該当するのではないかという思いを強くしていた。そして実際に著者も、過去に滅びてきた文明と現代文明の共通点を指摘し、崩壊に向けたいくつかのサインが徐々に顕在化していることを指摘する。本書には数多くの古代文明がケーススタディーとして取り上げられており、それらを見ながら改めて思うのは、文明の崩壊が即人類の滅亡とはならなかった歴史についてである。

だが現代文明は、物質圏次元における地球の生存危機が危ぶまれるようになってきており、次に人間の文明が滅びる時には人類まで滅びてしまう可能性もなくはないのではないかという推論が生まれた。

本書を通じて著者は、文明崩壊のプロセスとメカニズムを解明することに加え、文明崩壊から救う手立てについてもインプリケーションを提供している。今後自分が教育哲学について探究していく際において、教育の意義と社会や文明の存続は切っても切り離せないテーマになってくるだろう。上記の書籍についてはまた改めて読み返したいと思う。

これから仮眠を取り、仮眠後にはテレマンに範を求めて作曲実践を行う。それが終われば、再びハーバーマスの書籍の続きを読み進めていく。ハーバーマスの哲学思想については触れ始めたばかり

であるが、すでに多くの洞察を与えてもらっている。そうした洞察は、私の専門である発達心理学に関する思想的な枠組みを再考することを促してくれ、非常に多くの実りを得ている。

これまで自分が探究してきたこと、とりわけ科学的に探究してきたことを、生粋の哲学者の思想をもとにして再検証していくことにこれから従事していく。もしかすると、これまでの私は、発達科学の枠組みに強く縛られすぎていたのかもしれない。

哲学者のハーバート・マルクーゼは、「私たちを自己の制約から解放するために必要なのは、一次元的な思考から脱却することである」と述べているが、人間発達に関するこれまでの自分の思考は一次元的なものであった可能性がある。それは発達心理学—ないしは発達科学—という一つの大きな領域に則った思考の枠組みであり、ここからさらに人間発達に関する探究を深めていくためには、一次元的な思考から脱却する必要がある。そうしたことを可能にするカギがまさに、哲学的な探究にあるように思える。フローニンゲン:2018/9/24(月)13:38

3172. アセスメントを取り巻く思想上の問題

午前中の読書は随分はかどり、午後から再びヨルゲン・ハーバーマスの“Moral Consciousness and Communicative Action (1990)”を読み進めた。つい先ほど、この書籍の初読を終えた。本書を読む際の焦点は、ローレンス・コールバーグの道徳性発達理論の哲学的枠組みをより深く理解することであり、随分と多くの収穫があった。これから少しずつ備忘録として日記にそれらの収穫について書き留めていくことになるだろう。

先日にTOEFL試験を終えてからは、随分と書籍を読む時間が多くなった。これは私にとってはとても嬉しいことであり、探究を望む魂の渇きを潤すかのように読書に没頭することができている。午前中に集中して読書に取り掛かっていたせいか、仮眠中の意識の中で、内的ビジョンとしてハーバーマスの書籍が立ち現れた。仮眠の最中にもその続きを読むような現象が、仮眠中の意識および脳内で行われていたことは興味深い。

昼食を摂っている最中にそういえば、アセスメントについて考えていたことを思い出す。企業社会にせよ、学校社会にせよ、そこで現在用いられているアセスメントは、アセスメントを受ける者の成長に資するものではないということは一つ大きな問題だろう。そこで行われているのは、アセスメントを通

じて何かしらの枠組みに当てはめるだけの「ボックス化」や、企業社会においてはそれに加えて、暗示的に人間を「商品化」するためにアセスメントが活用されているように見受けられる。

学校社会においても、結局は企業社会との癒着により、各種アセスメントは子供たちを商品化し、極めて限定的な基準に基づいた商品価値の選別に用いられているような状況だ。アセスメントは兎にも角にも、さらなる学習や成長に資するために用いられなければならない、個人をボックスに当てはめるためではなく、その人の固有性を明らかにするために活用すべきだと思う。

アセスメントの価値の一つは、それをを用いることによって初めて明らかにされるものがあることだが、それをを用いて単純に型に当てはめるのではなく、アセスメントを通じてその人の固有性を導き出していくという発想が兎にも角にも重要だろう。

現在、発達科学の知見が少しずつ企業社会に浸透している状況において、アセスメントの意義や限界に関する深い認識、そしてアセスメントを取り巻く既存の発想の枠組みそのものを見通すような認識を獲得していかなければ、開発されるアセスメントは軒並み私たちの発達を阻害するものに留まるだろう。おそらく発達科学の知見に基づいて高度なアセスメントを開発するよりも優先されるべきことは、アセスメントに対する認識の変容であり、アセスメントを取り巻く思想的枠組みの整備にあるのではないかと思う。フローニンゲン:2018/9/24(月)17:53

No.1324: In the Pleasant Morning

As with the morning in recent days, this morning is very pleasant. I'll start to read some books about philosophy that I bought yesterday. Groningen, 10:00, Wednesday, 10/17/2018

3173. 発達測定について:意味と文脈

雨が降ったり晴れたりを繰り返す奇妙な天気が続いている。今は晴れ間が広がっているのだが、つい数分前は小雨が降っていた。

今日はこれから過去の日記を少しばかり編集し、入浴と夕食を済ませたら、バッハの四声のコーラルに範を求めて作曲実践をしようと思う。作曲実践がどれだけ自分の日々を豊かにしてくれていることかを考えると、感謝しても仕切れないほどである。おそらく作曲実践があれば、これからやっつく

る精神的に過酷な冬を乗り越えることができだろう。今年の冬を乗り越えた先に待つ春には、また新たな自己がそこに存在していることは間違いないように思える。

作曲実践に合わせて、今このようにして書き留めている日記にも、私は大きく支えられている。この日記は、日々の生活の中で考えたことや気づいたことを備忘録として書き留め、さらに考えや気づきを深めていくことに大きな役割を果たしている。

今日も数冊ほど書籍を読み進めたが、そうした読書を通じて得られたちょっとした考えや気づきをメモとして書き留めておくことがどれほど大切なことか。それはメモであるから、学術論文を執筆するような形で慎重に筆を進めていく必要はない。とにかく自分が考えたことや感じたことを文章の形で外側に一度出しておくことが最優先される事柄である。そのようにして書き進められた日記を後日読んだ時に、考えや気づきに誤りがあればそれを修正し、またそこから得られた新たな考えや気づきを書き留めていくということを繰り返し行っている。これはこの二年間絶えず行ってきたことであり、今年もそれを継続し、来年以降もずっと継続していくことになるだろう。こうした継続こそが、一生涯の学びと発達に結びついていく。

夕方、改めて、発達測定においてどうしてチェックリストのような形式を採用しないのかについて考えていた。端的には、私たちの発達構造は特定の文脈によって立ち現れる性質を持っており、チェックリストのような形式では、発達構造が立ち現れる文脈設定に限界があるからだ。設問項目に○×で答えることや選択肢の中から回答を選ぶ形で発達段階を特定することが極めて難しいのは、そうした形式では特定の知性の発揮のされ方が見えない。特に意味を生成する力と密接に関わった知性を測定する場合、チェックリストのような形では発達段階を特定することはできない。

発達段階を特定する際に重要なのは、どのような言葉が語られたかではなく、どのような言葉がどのような文脈においてどのように機能しているか、という点である。それを行うためには、最も広く用いられているように、自由記述形式の形を採用し、ある文脈において意味をどのように紡ぎ出し、その意味が文脈内でどのように機能しているかを見ていく必要がある。

ここ最近思うのは、アセスメントの問いとして確かに広い意味での文脈設定がなされているのだが、自由記述形式のアセスメントでは、意味を生成する力のみならず、そもそも自ら文脈を規定する力、

そして文脈を生み出していく力を発揮することを要求しているように思える。意味と文脈が不可分なものであることを考えると、そのようなことが言えそうだ。そして、意味を生み出す力にせよ、文脈を規定し、文脈を作り出していく力にせよ、そこには各人の知性が持つ固有性が発揮される。

自由記述形式の回答を見ていていつも驚かされるのは、回答の多様さであり、そこに各人の知性の固有性が現れる。また、回答の中に潜む構造的な特性は、発達段階という普遍的な特性と対応していることも改めて驚かされることである。フローニンゲン:2018/9/24(月)18:14

No.1325: A Grain of A Moment

I perceive a continuous flow of a series of blinking grains of moment. Groningen, 15:21,
Wednesday, 10/17/2018

3174. そこにあるのは「スクーリング」か「ラーニング」か?

時刻は午後の七時半を迎えた。いつもこの時間に夕食を摂り終え、日記を一つだけ書き綴ることが多いように思う。

先ほど夕食を摂りながら、現代の教育には果たして真の意味でのラーニングが存在しているのだろうか?ということを考えていた。真の意味でのラーニングというのは、学習そのものを愛する気持ちを育み、自己及び人生そのものを深めてくれるものだとは私は考えている。そうした定義に基づくようなラーニングは、残念ながら既存の学校はほとんど提供してくれないのではないかと思う。そこにあるのはラーニングではなく、単に「スクーリング」と形容できるようなものではないだろうか。

スクーリングとは端的には、学ぶことを愛する気持ちを育むことなど念頭に置かず、また生徒の個性や自己を深めることに焦点を置いておらず、学校という建物に足を運び、そこで窮屈な環境の中で無理やり情報を詰め込まれるような習慣的行為のことを指す。

学習においては兎にも角にも内発的動機が大切だが、スクーリングは基本的に外発的動機のみに基づいて行われる。そのようなことを考えながら、さらに危惧するのは、現代においては、そうしたスクーリングに黙って従いながら無事に通過していく子供たちが多いということだ。確かに小学生や中

学生ぐらいであれば、自らの置かれている環境の歪さを内省するのは難しいのかもしれないが——そしてそうした発達特性を本質的に持っている子供たちに上記のようなスクーリングを強制することは極めて問題があるように思えてならない——、仮に自分の子供が黙ってスクーリングに従い、しかもそこで得られた成績に一喜一憂したり、ましてやスクーリング上での評価項目(テストのスコア)を高めることに躍起になっていたら相当に危惧すると思う。

スクーリングに盲目的に従い、そこで与えられる外発的な動機に依存し続けた結果として、仮にそうした外発的な動機付けがなくなったら、子供たちはどうなってしまうのだろうか。おそらくその成れの果てが、自ら自律的に学ぶことをしない大人につながり、人格的成熟がピタリと止まってしまう大人の大量生産なのだと思う。

私は来年再び大学院に戻って探究を続けようと思っている。以前にも書いたように、学術世界の中で探究をしていくことには時に窮屈さもあるのだが、今回は再び独学では本格的に探究ができないテーマを見つけ、学術機関の力を借りながらそれを探究していくことにした。

とにかく読みに読み、書きに書くということを行いたい。その衝動を抑えることは難しく、それこそがまさに内発的動機の発露であり、自分の魂の声なのだと思う。

仮に博士課程に進学した場合、これから何年の歳月を学術機関の中で過ごすかわからないが、それは決してスクーリングであってはならず、絶えず自分の究極的な関心事項に根ざしたラーニングであるべきだ。フローニンゲン:2018/9/24(月)19:48

3175. それは本当に「病理」なのだろうか？

まだ雲が少しばかり残っているが、雨は止み、遠くの空に夕日が沈むのが見える。暖房をつけるのは十月に入ってからにしようと思っていたが、そのようなことを言っていられないほどに今日は寒さがあったので、気温が上がる午後までずっと暖房をつけていた。夜も冷えるであろうから、先ほどまた暖房のスイッチを入れた。

入浴中に、私たちの理解の範疇を超えたものを「病理」とみなすことの危険性について考えていた。精神療法の関係者に聞くと、近頃は年を経るごとに精神病理の数が増えているということを知る。確

かに、その人やあるいは社会を脅かす病理が真に発見される場合もあるだろうが、もしかすると現在世の中で言われている病理のいくつかは、本来病理ではないものを私たちが勝手に病理と名付けてしまうことによって生まれたものなのではないか、ということを考えていた。

仮に私たちが単に理解できないものを「病理」と名付けてしまっているのであれば、それは発達理論の考え方而言えば、「前超の虚偽」を犯してしまっていることになる。「前超の虚偽」とは端的には、高次元の現象を低次元のものに貶めてしまったり、むしろ逆に低次元のものを高度なものと誤解することである。

仮にその「病理」と呼ばれるものが、その人の固有性に根ざすものであり、極めて類まれな力であった場合には、それを病理と名付けるのは随分と問題があるだろう。おそらく、精神病理の世界において病理と名付けられるもののほとんどは、実証的な裏付けがあって初めて病理と名付けられたのだろうが、そうだとすも安易に病理と括ってしまう傾向には気をつける必要があるように思う。これはもしかすると、「病理とは何か」という根本的な問いから始まり、究極的には「人間とはいかなる存在なのか」という問いに導かれていくような問題かもしれない。果たして、病理とは一体何ののだろうか。

私はこれまで精神療法の理論などを勉強することを通じて、自分でも薄々気づいているが、そうした理論体系の枠組みの中で病理だと見なされるような症状をいくつか持っている。ここでさらにテーマとして浮かんでくるのは、「果たしてそうした病理を治癒することが良いことなのか？」というものである。

おそらく多くの人、病理というものは治癒されることが望ましいと思込んでいるだろうが、果たしてそうなのだろうか。私たちの精神は非常に複雑な性質を持っており、仮にその病理が治癒されてしまうことによって、精神の全体性がむしろ崩れ、より大きな病理が生まれてしまう危険性もある。またそもそも、仮にその病理がその人の固有性と密接に関わっている場合には、その病理を治癒することはその人の固有性を蝕んでしまうことにもつながりかねない。米国の某映画監督が、自分の作品の根源には自らの精神病理があることを理解し、頑なにサイコセラピーを受けることを拒んだというエピソードを思い出す。

ここまでのところを簡単にまとめると、私たちの理解が及ばないことを単純に病理と名付けることの危険性の一つには、その人の固有性—ないしは創造性—を殺すことになりかねないということであり、それはこの社会から一つの多様性を削ぎ落とすことにつながりうるということだろう。

現代社会において、標準化・平準化の波が至る所に押し寄せているのを実感する。「病理」と単純に括ってしまうことも、その表れの一つだろう。

午前中に読んでいた“The Collapse of Complex Societies (1988)”の中で、文明の崩壊を招く最大の要因の一つには多様性の欠落が挙げられていた。今朝方、この書籍を読む前に偶然にも私は、幼少時代に飼っていた金魚とカナヘビについて思い出していた。当時の私は金魚とカナヘビの命を自分の無知から奪ってしまった。そこには多様性の欠落があったように思う。

金魚とカナヘビが入れられた環境について思い出す。そこには本来あるべきはずの生態系の多様性が全くもって欠落しており、均質化された人工的な空間だけがそこにあった。結局それによって、多くの金魚、そして一匹のカナヘビの命がこの世からなくなってしまった。

この現代社会に押し寄せる標準化・平準化の波により、どんどんと多様性が失われ、文明圏における人間の生態系が非常に危険な状態にさらされているように思えるのは私だけだろうか。フローニンゲン:2018/9/24(月)20:12

3176. 火曜日の朝に

今朝は六時半に起床し、七時から一日の活動を始めた。起床時の闇は晴れ、今は少しずつ明るくなってきている。早朝にわずかばかり雨が降っていたが、今日は一日を通して曇りのようだ。昨日から部屋の暖房をつけるようになり、いよいよ寒い季節がやってきたのだと思う。フローニンゲンにおいては、夏が秋のような涼しさであり、秋がもう冬のような寒さになる。これからの冬に備えて、心身を整えていくことにしたい。

今日はまず最初に、モーツァルトに範を求めて作曲実践を行う。明後日からボストンへ旅行に出かけるが、その時にはモーツァルトの楽譜を持って行き、当地ではもっぱらモーツァルトの曲を参考にして作曲を行う予定である。今日参考にする変奏曲は比較的短いものであり、音符の数も多くない。

おそらくそれでいて、モーツァルトらしさがそこに込められているだろう。楽譜の外形に惑わされず、こうしたその作曲家らしさを身体感覚を通じて掴んでいくことが、自分の作曲語法の確立に有益だろう。

作曲実践がひと段落したら、今日も旺盛に読書に励む。とにかく読みに読み、自分の関心事項に対して自ら考える中で自分なりの答えを育んでいく。可能であれば、本日は三冊ほど学術書を読み、休憩として、先日のフィンランドを訪れた時に購入したシベリウスに関する書籍を読みたい。三冊の学術書はそれぞれ、“Derrida & Education (2001)”、“Delouse and Education (2013)”、“Rethinking the Education Mess: A Systems Approach to Education Reform (2013)”である。

これらの三冊についてはすでに昨年に初読を終えていることもあり、比較的馴染みのある感覚がするだろう。初読からおよそ一年経った今、どのような洞察を新たに得ることができるのか、どのような新たな考えが自分の中に芽生えるのかに期待しながら本書を読み進めていく。

今はまだ定住する場所が決まっておらず、数年に一度は引越しを繰り返すような生活を送っている都合上、むやみやたらに書物を増やすことはできないが、今後比較的長く一つの土地に住むことがわかれば、その際には数多くの哲学書を揃えたいと思う。とりわけ教育哲学を中心に、入手できる範囲の全ての書籍を読むような心意気で当該テーマに向き合っていく。

今の自分の心の有り様を見ていると、今日もまた非常に充実した一日になるであろうことを確信する。
フローニンゲン:2018/9/25(火)07:21

3177. 「考える権利」の剥奪

早朝は雲が多かったが、午前九時を回った今は晴れ間が広がっている。今日は平日の火曜日だが、休日のように辺りが穏やかだ。

今から一時間ほど前に、空に浮かぶ雲に朝日が照りつけており、雲がとても美しい色を発していたのを思い出す。朝日の輝きを見ていると、一日の活動に向けて心身のエネルギーが高まっているのがわかった。

今日もまた自然に寄り添いながら一日を過ごしていくことになるだろう。窓の外に広がる景色に支えられながら、今日も自分のライフワークを少しずつ進めていく。自分のライフワークに打ち込めるほどに至福なことはない。

先ほどから“Derrida & Education (2001)”の再読を始めた。本書を読みながらふと、もしかすると現代の教育においては、「考える権利」というものが剥奪されてしまっているのではないだろうか？ということを考えていた。知識を単に詰め込むことや、一方向的なティーチングの氾濫によって、子供たちが自ら考える権利を奪ってはしないだろうかという問題意識が浮上したのである。自分自身を振り返ってみると、何か物事を考えるためには心のゆとり、そして時間的なゆとりが必要なのだが、学校の中では一つのことをゆっくりと考えるようなゆとりが希薄のように思えてくる。

それと相まって知識が教師から一方的に流れ込んでくるような状態では、考える力を育むことはおぼつかないだろう。発達心理学者のロバート・キーガンの理論モデルで言えば、自己主導段階というのは、まさに自ら自律的に思考を推し進めていくことができるという特徴を持つが、成人人口のうち、この段階に到達している者はそれほど多くない。

こうした背景には、幼少期の教育において、自ら考える訓練をどれほどしてきたかがカギを握っているように思えてくる。成人の発達が停滞している背景には、そして自律的な知性を獲得している成人が少ない背景には、子供時代に考える権利が剥奪されてしまっていたことと関係しているのではないかと思えてくる。

こうした問題に付随して、教育哲学者のイヴァン・イリッチが指摘しているように、学校だけでしか通用しない「学校知」を獲得することに躍起にさせる現代の教育の問題も依然として強く残る。学校社会でしか通用しない知識を大量に獲得し、それでいて自ら考える知性が育まれていない状況は非常に危機的であるように思える。さらには、教育と企業社会の癒着に際して、企業社会が学校知にばかり焦点を当てて人を評価・判断していることも大きな問題だろう。

思考のあり方というのもその人に固有なものであることを考えると、考える権利の剥奪は、その人の固有性を剥奪することにつながり、どこか人権の問題にまで拡張されていくようなテーマのように思えてくる。これからまた上記の書籍の続きを読み進めていく中で、自分の考えを少しずつ深めてい

こう。その過程の中で考えたことを、一切のまとまりがなくても気にすることなく、日記として書き残しておこうと思う。フローニンゲン:2018/9/25(火)09:25

3178. 哲学教育について

今日は一日中曇りだという予報があったが、そうではなく、太陽を拝む時間が随分多いことを有り難く思う。日の光は暖かいが、外はとても寒い。

先ほど昼食を摂り終えて、ゴミを捨てに外に出た時、昼の時間にもかかわらず、極めて寒いことがわかった。今は少しばかり書斎の窓を開けて換気をしているが、暖房はつけたままである。ボストンも同じような気温であるとのことであるから、旅行の際には必ずジャケットを持っていこうと思う。

今日は午前中に、ジャック・デリダの哲学思想と教育哲学を関連付けた書籍を読んでいた。いくつも考えさせられることがあり、そうした考えは自分の教育思想の種になっている。こうした種を蒔くことにも意味はあるが、単に種をまいていてもしょうがなく、それを発芽させていく必要がある。種というのは、ある意味読書の中で得られる小さな気づきであり、これをしっかりと土に埋め込んでいくことがまず必要だ。そのための手法の一つとして、やはり文章を書くことを挙げたい。今このようにして執筆している日記は、読書や何かしらの体験を通じて得られた種を土に埋めていく役割を果たしている。

どれだけ小さな種でもいい。思いついたことをあれこれと日記として書き留めておくことは、種を植えていく働きを持ち、実は土壌そのものを耕すことにもつながっているのではないかと思う。

午前中にぼんやりと考えていたことの続きとして、考えるという行為にも固有性が滲み出すのであれば、考えることを育む教育は極めて大切なのではないか、ということだ。自らの固有性は、芸術性や霊性のみならず、考えるという行為そのものの中にも見られるということは、また新しい気づきであった。

自らの思想を育んでいくための哲学教育の重要性について考える。「哲学教育」と言うと非常に堅く響くかもしれないが、それは自らの考え方の固有性に気づき、固有の考えを育んでいくことを目指

すものである。以前、今の私は自らにシュタイナー教育に類するような芸術教育や霊性教育を施していると述べたが、ここでもまた哲学教育を自らに課していくことの重要性に行き当たる。

午後からは、“Deleuze and Education (2013)”の続きを読んでいくことにし、この読書もまた自らに課す哲学教育に他ならない。フローニンゲン:2018/9/25(火)13:09

3179. 子供たちに「対して」か「共に」か？:相互発達の権威の必要性

今日も午前中のほぼ全ての時間を哲学書を読むことに充てており、その時間にかなり脳を使っていたためか、昨日と同様に、いつもより多くの仮眠を取った。時刻は午後の三時を迎えようとしており、ここからまた午後の活動に入っていきたい。

午前中にデリダの思想と教育哲学に関する書籍を読み終え、昼食後からはドゥルーズの思想と教育哲学に関する書籍を読み終えた。ここでひとまず休憩として、一度作曲実践を行い、その後に再び読書を再開したい。

この世界に存在する自分なりの良書を見つけ、それらと向き合いながら日々の歩みを進めていこうと思う。決して、消毒されたような書物を読むことをせず、逆に毒があるような書籍を読んでいくことにする。読み進める書物には、自分を刺激する何かがなくはならず、それは著者の実存性と言ってもいいかもしれない。著者の実存に根ざす強い問題意識が立ち込めているような書物をとにかく読み続けていくことにする。まさに自分の人生は、そうした書物と共にゆっくりと深まっていく。そのようなことを考えていると、先ほど読み進めていた書籍の中に、ドゥルーズが徒弟的な教育、つまり教師が生徒と一緒に学んでいくことの重要性を強調していることを思い出した。

この八年間を通じて、私に大きな影響を与え続けている教育哲学者のザカリー・スタインは、教育上における権威の重要性を指摘しており、それはドゥルーズの教育思想とも繋がってくる。

これは学校における教師だけではなく、スポーツや芸術の世界における指導者にせよ、親も含めて、旧態依然とした教育上の権威の発想は、発達理論を用いれば、慣習的段階における権威に根ざしているように思う。この段階の権威は、子供たちに「対して(to)」何かを教え込もうとする。それは知識であり、技術であり、何でも構わないが、この段階の権威は、一方的に子供たちに対して何か

を提示しようとする。すなわちこの段階の権威の発想には、子供たちと「共に(with)」に学習を進めていくという意識が欠落しているのである。スタインは権威の存在の重要性を指摘しており、私もこの点について賛成である。

子供たちに完全なる自由を与えようとし、権威の欠落によって、過去にフリースクール運動は失敗に終わっている。重要な点は、子供たちを野放しにすることでも、慣習的な権威を振ることでもなく、子供たちと共に学びを深めていく権威が相互発達の教育によって子供たちを健全な発達に導いていくことだと思う。

シュタイナーも権威の存在の大切さを指摘しており、シュタイナー教育においては、子供たちが権威といかに向き合い、いかに権威を乗り越えていくかに関する配慮がなされていることを先日知った。発達理論の観点からも、私たちは成長の過程において必ず権威の存在が必要であり、権威を乗り越えていくことも発達課題の一つである。

現代社会の親や教師、そして各種指導者にせよ、子供たちに「対して」何かを教えようとする意識があまりにも強すぎるように思うのは私だけだろうか。そして、子供たちと「共に」学んでいこうとする親や教師、そして指導者が少ないように思えるのは私だけだろうか。俯瞰的に眺めれば、そうした親や教師、そして指導者に「対して」ではなく、彼らと「共に」人間発達や教育について学んでいくような存在が現代社会には求められているのかもしれない。フローニンゲン:2018/9/25(火)15:12

3180. 没入と超越

一日が怖いぐらいに早く過ぎ去っていく。今日も気がつけば午後の三時を回った。

欧州の地で私は一人、毎日同じ生活を送っている。読みに読み、書きに書き、作りに作る生活。逆に言えば、それしかない生活だ。

先日の日記の中で、私は自分の無知さと一生涯にわたって付き合っていくことを書き留めていたが、これはある意味、終わりのないプロセスである。仮に、自分の無知さと格闘しようと思ってしまうたら、それは泥沼の道を歩むことになることが予想される。

確かに、私は学ぶことをこの人生に託されたのだと思う。誰かの代わりに学びを深め、その誰かのためにその学びを還元していくこと。その些細なことが、自分に託されたことなのだという思いに変わりはない。しかしながら、この「誰か」というのが仮に共同体の次元で捉えるべき存在であるならば、ここからの学びは相当に過酷なものになるかもしれない。

今日も哲学書を読み続けることによって、自分の探究課題と向き合っており、その最中にあるのは自分の意識は探究に対して常に没入状態にある。だがひとたび、探究から離れて休憩を取ると、時に自分の探究そのものを超越的な次元から眺める視点が生まれる。それによって、常に自分は一体何を探究しているのかを問われることになる。これは自己にとっての矯正力となり、こうした矯正があるおかげで、絶えず自分の探究を深めていくことができているように思う。

一方で、ここ最近の私の頭の中にある事柄は、探究した事柄をいかにこの世界に還元していくのかについてであり、さらにはその還元の方法についてである。欧州での探究の日々が続けば続くほど、この意識は高まっていく。だが今は、何かを還元できるほどに自分は何も学んでいないことに気づかされる。そうした思いが欧州での三年目を迎えると再び吹き上がり、今年一年は学術機関に所属することはしないが、独力で学びを進めていこうと決意した。

それは完全に自分の内発的動機に基づくものであり、誰かから強制されるようなものではない。とにかく今年一年は、来年の探究への準備の期間とし、教育哲学や芸術教育、そして霊性教育に関する探究の土台を作っていこうと思う。決して焦ることなく、日々の歩みをゆっくりと着実に進めていく。その過程の中で、超越的な意識による矯正的な気づきにたびたび出くわすだろう。

そうした矯正力の力を借りながら、自分の探究が向かう方向について常に確認をしていく。今日の夕方から行う探究もまた、没入と同時に超越の双方が入り混じるものになるだろう。没入と超越という二つの観点を常に忘れないようにしたいと思う。フローニンゲン:2018/9/25(火) 15:29